



花が美しいからといって花そのものが美ではありません。花を見てそれを美しいと感じ取る人間がいてはじめて花の美を見出すのであります。(天石東村、『書のこころ』(東京書籍、1987)より)

13日に、観音寺と三豊の先生方をお迎えして書写の研究会を開催しました。子どもたちが互いの書いた文字を見せ合いながら、「この文字の、ここが上手」と言葉を贈り合う姿を見て、文字の美しさは、文字そのものにあるのではなくて、それを美しいと感じている子どもにあるのだなと思いました。

わたしたちは見つけた 友の光と 書の美しさを

この日は、5年生と6年生が授業を公開しました。朝、校門で会った時には「なんでぼくたちだけ昼から残って授業をするん？」と多少ぼやいていた子もいましたが、授業の前には円陣を組み、やる気いっぱい姿を見せてくれました。

■5年生の授業で

私は、5年生の授業の前半と、最後の数分を見ました。最後に教室に戻った時、一人の子の文字が、とても上達しているのが目に留まりました。

後で担任の先生に聞くと、その子は、まずは、どのように書けば自分の文字がよりよくなるかを近くの友達と話し合ったのだけれども、まだこつを会得できなかった。そこで、クラスのみんなに、どうしたらよいか考えてほしくて全体の場で相談した、とのことでした。伸びたくて仕方がない、その意欲は結実するのだと思いました。



■6年生の授業で



6年生は、「中秋の名月」という文字の学習でした。半紙を六つに分け、その枠内に一文字ずつ書く際、どのように書けばよいかを話し合っていた時のことです。ある子が、「六つに分けたところを部屋だとしたら、文字が大きすぎると窮屈だし、小さすぎると寂しい」と生活体験に結び付けて発表しました。まるで文字に心があるかのような比喩です。このような感覚がいずれ「文字に魂を込める」高みへと登っていくのかもしれませんが。

■書家・小山梨風先生のご講話から

書道パフォーマンスで子どもたちに慕われている小山先生から、「非人磨墨、墨磨人」という言葉を教えていただきました。人が墨を磨っているのではなく、墨を磨ることによって人の方が磨かれているという意味だそうです。墨を磨る微かな音のみが聞こえるような静寂に、人は自分を見つめているのでしょうか。

研究会後、校長室で小山先生とお話をしました。以前、書道パフォーマンスを披露した時に、「筆の音が聞こえた」と言った子どもがいたとのことでした。小山先生が個展を開くときには、「筆の音が聞こえる」と題をつけているそうですが、「そこに気付く子どもの感性ってすごい」とおっしゃっていました。

じっと何かを見つめる時間。そっと何かを耳を澄ます時間。人が磨かれるのはそんな時間かもしれません。

